

侘茶の系譜- 『山上宗二記』 -(I)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 誠一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4211

侘茶の系譜

——『山上宗二記』——
(I)

渡辺誠一

村田珠光の創始した草庵の茶の湯が、武野紹鷗を経て、千利休によつて侘を理念とする茶の湯、つまり侘茶として大成されたことは、茶道史に於ける常識である。

茶道の世界では、△侘▽という言葉は、何かに付けて口になされており、また名詞に冠して、侘茶・侘教寄・侘人・侘びた茶碗等々、極めて自然に使われている。それらの言葉を口にしても、また、それらを耳にしても、誰もが解ったようなつもりになっている。実際、漠然とはあるが、感覚的には理解しているのである。ところが、いざ「侘とは何か」、「侘茶とはどんなものか」と聞き直つて質問されると、その返答に窮してしまうのが常である。

これまで、侘や侘茶に関しては何多くの者によって研究され、語られて来た。△簡素で寡黙な美▽・△内面的に充実した、底光りのする美▽・△艶消しの、錆びた、地味な、落着いた美▽・△無一物の美▽・△枯淡寂靜の美▽……等々、美意識の面から説明された。しかし、

これらの説明は、侘の一面を表わしてはいるが、侘ではない。

『山上宗二記』は、珠光・紹鷗・利休と続く草庵の侘茶の秘伝書である、と言われている。そうだとすれば、この書は、創成期の侘茶の系譜を知る上で欠くことのできない貴重な資料である。この秘伝書を味読し、侘茶の歴史的な展開の跡を辿ってみれば、必ず侘の理念が明らかになる筈である。

以下の小論は、『茶道古典全集』（淡交社刊）所収の『山上宗二記』をテキストにして、随時『茶道全集』（創元社刊）・桑田忠親著『山上宗二記の研究』（河原書店刊）を参看しながら、珠光・紹鷗・利休の窮めた茶の理念を追究し、侘の核心を捉えようとしたものである。つまり、侘の美学を確立しようとする狙った論考、と言うことができる。

山上宗二

「かの山の上の宗二、さつまやとも云し、堺にての上手にて、物をもしり、人におさるる事なき人也、いかにしても、つらくせ悪く、口悪きものにて、人のにくみしもの也、小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、その罪に、耳鼻をかせ給ひし」⁽¹⁾

右の文章は、山上宗二に関する記事には必ず引用される個所であり、⁽²⁾ 八耳鼻をそがれた茶人Vの話は、茶道に携わる人々には広く知れ渡っている逸話である。また宗二は、秀吉に仕えた八茶道七人衆Vの一人としても知られている。このように、山上宗二は事実上はつきり捉えられた人物であるにも拘らず、彼の経歴は不明で、彼の生い立ちや生活状況などについては全く知られていない。彼の伝記を纏めようとすれば、『天王寺屋会記』・『松屋会記』・『今井宗久茶湯日記』・『山上宗二記』などに記された簡単な資料を手掛かりに推測する以外に方法がない。

山上宗二は、天文十三年（一五四四）に泉州堺の薩摩屋という商家に生まれた。彼の一家は、堺の南の山上に住んでいたことから、その地名を採って山上と呼ばれていた。彼の父親宗壁は、豪商の主人として商売に精を出す一方、茶の湯にも励み、一廉の茶人として通っていた。

宗壁は、永禄二年（一五五九）八月十二日、大坂道悦・津田宗達を客に、また同十年極月一日、千宗易・天王寺屋道叱・津川宗及・武野新五郎（紹鷗の息子宗瓦）・山上宗二を客にして茶会を催している。宗易・道叱・宗及……等、一流の茶人を招いていることから、宗壁の

数寄者振りを窺い知ることができるともいえる。また、紹鷗の息子新五郎と宗壁の息子宗三が同席しているのも興味深い。

名物茶入の中に、宗壁肩衝というのがある。これは、「紹鷗褒美の名物茶入であり、所持者は、虚堂の墨蹟と同様に、山上宗二となっている。この宗壁肩衝は、虚堂の墨蹟と共に、おそらく亡父の遺品として、宗二に譲られたものである。紹鷗が宗壁所持のこの肩衝茶入を褒めたというからには、宗壁はおそらく紹鷗の弟子であったに違いない」⁽³⁾

このような数寄者を父親に持つ宗二は、年少の頃から茶の湯に興味を示し、熱中していたようである。二十一才という青年時代には、既に新進気鋭の茶人として注目され始めていた。彼は、永禄八年（一五六五）五月七日、宗易・草部屋道設・新五郎・今井宗久を招き、床には靈照女の絵を掛け、高麗茶碗で堂々とお茶を点てている。

茶会記には、宗二の名は天文二十三年（一五五四）十二月の朝会にそのお客として顔を出し、その後も頻繁に出現するが、これは、山上宗二ではなく、石川宗二である。天文二十三年と言えば、山上宗二はまだ十歳である。十歳の子供が宗易・網干屋道琳・紅屋宗陽といった茶人に混じって茶会に出る訳がない。石川宗二は、時には宗仁と記されることもあるが、大抵宗二と記されており、永禄年間に入ると、宗二が石川なのか山上なのか判別するのが困難になって来る。

いずれにしても、山上宗二は、永禄八年に茶会を催し、同十年に父宗壁の茶会に出たのを初めとして、その後、亭主として、又客として、頻々とその名を茶会記に現わすようになる。

宗二の主催する日立つた茶会としては、永禄十一年十月二十七日の朝会がある。彼は、宗及一人を招き、錢屋宗仲所持の鍬釜（釜開き）を炉にかけ、お茶がすんでから、床に靈照女の絵を掛けて見せている。

この（靈照女）は、永禄八年の茶会にも用いられたものであるが、靈照女とは、唐の龐居士の娘で、父に倣って大悟した禪者である。尚、

これと同じ似絵は納屋宗順も所持していた。こちらは住吉屋伝来のもので、永禄十年十二月二十七日の茶会で、宗及によって掛けられている。その表具は、「上下あさきとんす（浅葱緞子）・中とんきん（東京）・一文字風躰（帯）白地金地金欄」と、華やかなものであった。

宗二は、商業に携わりながらも、茶の湯に精進し、やがて堺でも茶の湯上手・物識りとして、押しも押されもしない一流の茶人となった。天正元年とその翌年には、信長の開催した妙覚寺の茶会と、相国寺の茶会に招かれるようになった。

天正元年十一月二十三、二十四日と両日に互って、信長は京都の妙覚寺で茶会を開いた。二十四日の朝会は、松井友閑を正客とし、今井宗久と山上宗二を相伴として行われた。囲炉裏に鶴首の釜を鎖で釣り、床の間に牧溪の遠浦帰帆の絵を掛け、その前に三日月の葉茶壺を飾り、蕪なしの花入には白梅が活けてあった。信長が活けたものである。茶入は作物茄子、茶碗は大覚寺の天目茶碗であった。

懷石料理は、雉焼・鶴の汁・亀足蒲鉾（串に刺したもの）・鯛の刺身・鶉の焼鳥。菓子にはむぎ栗・金柑・金団・煎榎・焼餅であった。

この席上で、宗易が濃茶を点て、宗久が薄茶を点てた。

宗易手前也、上様御出座被成、御茶召上ラレ候、三日月ノ御茶御引カセ被成候ノ由御説候也、後、薄茶、宗久手前ニテ、是モ、上様召上ラレ、一段ノ御キケンニテ候也、

三日月の茶壺の葉茶を挽かせたとあるから、口切の朝会だったのである。この時信長の機嫌は上々であった。

信長にとって、天正元年は、將軍足利義昭を追放し、浅井久政・長政、三好義経らを滅ぼした年であり、戦闘も一段落し、戦勝者の気分を満喫している時期であった。しかも、天下一の花入と言われている蕪なしに白梅を活け、恐らく一座の者たちから絶賛されていたに違いないから、余計信長は上機嫌だったのである。この時、今井宗久は五十三歳、千宗易は五十一歳、山上宗二は二十九歳であった。宗易が信長に仕えたのが五十歳前後であったことを考えると、宗二は、まさにとんとん拍子に出世していたことになる。

その翌年三月二十四日、信長は京都五山の一つである相国寺で茶会を開催した。この時、山上宗二は、堺衆として、宗易・宗及・宗久・宗陽らと共に招かれた。

床の間には趙昌の五種の菓子の絵を掛け、方盆に松本茄子を置き、藤波の釜・手桶の水指・合子の水翻・柑子口の柄杓立・犬山天目茶碗・数の台などという名物茶器を用いた台子の点前であった。それが終ると、信長は宗久・宗易・宗及の三人を書院に招き、千鳥の香炉を拝見させた。

それから三日後、信長は、宗久・宗易・宗及を連れて東大寺の正倉

院を訪れ、その御物の一つ、希代の名香と言われる蘭奢待を切り取り、後にその粉末を一包ずつ宗易と宗及に与えた。二人が名物香炉（宗易が珠光香炉、宗及が不破香炉）を所持していたためである。

山上宗二は、当時既に一流の茶人となつてはいたものゝ、宗久・宗易・宗及の三人と較べれば、年令的にも、技巧的にも、人間的にも、一段と劣つていたようである。そのことは、信長の対応の仕方から窺うことができる。

宗二にとつて、宗易は二十余年の長きに亙つて茶道の奥儀を伝授して貰つた最高にして最良の導師であり、宗久・宗及は常に茶人の鑑とすべき大先輩であつたのである。

師宗易が信長に茶頭として仕えるようになると、宗二の社会的地位も次第に高まり、信長や信長の側近とも近付きになり、やがて、信長から八馬の絵V・八乙御前釜V・八紹鷗小叢釜Vなどを拝領する程までに出世するようになった。

山上宗二は、師宗易を絶対的に信頼し、尊敬していたが、宗易もまた宗二には何かと目をかけ、愛情を注いでいたようである。

天正十年六月、本能寺の変で信長が横死すると、間もなく秀吉が信長の後継者となつたが、宗易もまた秀吉の茶頭となつた。この頃から、宗二は瓢庵という雅号を使うようになっていた。

秀吉は、天正十年十月十一日から数日に亙り、大徳寺に於て信長の葬儀を催した。

十月十日ヨリ 上様御仏事アリ、

十一日ニハテンキヤウ（転経） 十二日ニトシヤ（頓写） 十三日ニハセン法（饑法） 十四日 入室也、 古溪御行候、

仙岳ノ首座 惣首座侍者

この入室の儀に、「宗二は師の宗易と共に入室が許され、古溪宗陳の勘弁をうけて商量問答をしているから、坐禅の修行もまた相当なものであつたとみてよい。」⁽⁸⁾

山上宗二は、自ら「茶湯ハ禅宗ヨリ出タルニ依テ、僧ノ行ヲ専ニスル也、珠光・紹鷗、皆禅宗也」と記し、また「道陳・宗易ハ禅法ヲ眼トス、」と極言しているように、彼もまた参禅し、禅の精進に励んでいたのである。師宗易が禅に基づく侘を追究したのと同様に、禅によつて培われた侘の境地を求めながら、日々、師に倣つた生き方をしていたのであろう。

宗二は、間もなく、秀吉からも一流の茶人として認められるようになり、天正十一年二月頃、秀吉から大壺を拝領した。宗及はこの大壺を「土ヨシ、ナリ悪候」と批評している。

天正十一年七月七日、大坂城落成祝いの茶会が催された。勿論秀吉の主催した茶会であつたが、宗二は、この茶席に、宗易・宗及・宗久・松井友閑（宮内卿印）・道薫（荒木村重）と共に招かれた。堂々たる人物の集まりであつた。

ところで、天正十一年十月九日、夜、津田宗及は、山上宗二を客に招き、風炉に蒲団釜を懸け、香炉を持ち出し見せているが、その時の茶会記に、「侘人之時、北国へ被越候刻、」と註を付記している。

天正十一年十月に宗二が窄人（浪人）であったということは、宗二がそれ以前単なる堺の商人でも、堺衆の数寄者でもなかったことを示している。宗二は誰かに仕えていたのである。つまり、秀吉の茶頭になつていたのである。恐らく宗二は、師宗易が秀吉の茶頭になつてから程なく、宗易の口利きで秀吉に仕えるようになったのであろう。ところが、ある時秀吉を怒らせるようなことをして、任を解かれ、北国へ逃避することになったのである。宗二が逃避していた時期は、正確には判らないが、天正十一年二月十七日から同年七月七日までの間のことであつたと推定できる。というのは、天正十一年正月五日、秀吉は、乙御前を自在で釣り、床に松花大壺を飾り、ウチクモリ大海の茶入・芋頭水指など名器を用いて朝会を催しているが、その席に宗二は宗易・宗及・宗久などと共に招かれており、また、宗久は、同年二月十七日、山上宗二と船松町の大和屋立佐を茶会に招き、つちはな釜を自在に掛け、天目茶碗と唐茶碗で濃茶と薄茶を点てゝいるが、宗二の浪人のことなどに関して何も記していない。そして、同年七月七日には、既に宗二は秀吉から茶会に招かれていたのである。

山上宗二は、北国落ちをしていた時、越前の柴田勝家の許に身を寄せていたらしい。宗二は、『山上宗二記』で、「次ニ師ヨリ請取ノ一卷、并三十年ニ及テ聴聞ノ覚書、今度ノ一乱ニ失ホトニ、俄ニ愚案ヲ以テ書記条、文字誤在之歟、」と記し、師利休から三十年に亙つて聴聞した秘伝書を今度の一乱で失つてしまったと述べている。今度の一乱とは、柴田勝家の滅亡の時であると言われている。⁽⁴⁾

天正十一年四月二十三日、柴田勝家の拠城北庄城は、前田利家を先

鋒とする秀吉軍によって完全に包囲された。二十四日、勝家は、天守閣に旗指物を掲げて城を飾り、自ら妻子を殺したうえ、火薬庫に火を放ち、自害したと伝えられている。宗二は、この時、北庄城に在城しており、この事件に遭遇したのである。宗二は、その後、どこに逃れたのか、どのような生活をしていたのか全く判らないが、前記のように、七月七日にはもう堺に戻っていたのである。従つて、天正十一年十月九日、宗二が宗及に招かれたのは、北国から堺に帰つてからのことであつたと考えるべきである。

宗二は、その後暫らくの間堺にいたらしく、十月十五日、秀吉によつて終日行われた茶会にも出席している。この時の御茶頭は宗易・宗久・宗及が務めた。客は、宗薫・小寺休夢・友閑・細川幽齋・紹安（千道安）・万代屋宗安・宗二・住吉屋宗無・宗甫・満田宗春・藤田平右衛門・宇喜田忠家・佐久間盛春・高山右近・芝山源内・今井隼人・古田左介・松井新介・中川忠吉・細井新助・牧村長兵衛・円乗坊・樋口石見・徳雲軒（施薬院全宗）であつた。一流の茶人たちが一堂に会した茶会であつた。ところで、右記の資料は『今井宗久茶湯日記』に記されたものだが、『宗及他會記』を見ると、この十月十五日の茶会に、山上宗二の息子道七までが出席しているのである。

秀吉の怒りを買ひ、追放された宗二が、当の秀吉から何カ月も経たないうちに大坂城落成祝に招待されたり、その後も度々秀吉の面前に出たり、また十月十五日の茶会のように、息子の道七共々に招かれたりしているのはどうしたことなのか。

秀吉の宗二に対する激昂が一時的なものであり、数カ月後には、秀

吉の勘気も大分弛んでいたと見做さなければならぬ。しかし秀吉は宗二を完全に許していた訳ではない。宗二を茶会に招く場合、秀吉は恐らく、単なる茶人として礼儀上招待しただけの事であつたらうと思われる。

天正十二年五月二十日、山上宗二は、久方振りに茶会を開き、宗無・宗及を招いたが、その時宗及は、『宗及他會記』に、「牟人之已後也」と付記している。この付記は、宗二がこの頃まだ浪人の状態であったことを示すものである。

しかし、天正十二年六月八日、秀吉は墨俣で茶会を催し、宗無・宗二・宗及を客に迎えている。この茶会は、小牧・長久手の戦の最中、秀吉が尾張加賀野井・奥城など織田信雄の属城を落とし、竹鼻を水攻めで攻略した翌日に行われたものである。宗二は秀吉に従つて戦場に赴いていたのである。浪人中であつたとするならば、戦火の中までのこと秀吉の跡を追うようなことはしなかつたであらう。恐らく宗二は、師利休の執り成しによつて、再び秀吉に仕えるようになっていたのであらう。少なくとも、秀吉の近くに居られる状態になつていたことは確かである。

宗二は、その後、天正十四年十月六日まで頻々として茶会記に顔を出し、亭主として、客として、堂々たる茶人としての片鱗を示している。

こゝで、天正十二年十月以降の、宗二に係わる茶会記を列挙し、宗二の活躍ぶりを窺つてみよう。

十月五日朝ヨリ終日

秀吉様於御座敷御茶湯有、

御茶堂 宗易・宗久・宗及仕候ナリ、

御人数

宗薫〔小寺〕 休夢〔松尾〕 友閑〔細川〕 幽斎〔方代屋〕 紹安〔山上〕 宗安〔住吉屋〕 宗二〔重〕 宗無〔瀨田〕 宗甫〔重〕 宗春〔重〕

藤田平右衛門 宇喜田忠家 佐久間盛春 高辻右近 芝山源内

今井隼人 古田左介 松井新介 中川忠吉 細井新助 牧村長兵衛〔政吉〕

円乗坊 樋口石見 徳雲軒薬院

キロリ 紹鷗アラレ釜、五トク、

御床 夜雨ノ絵、玉潤、前ニ捨子大壺

御棚ニ、細口、水仙花生テ、

御台子 上ニ、宮王肩ツキ 四方盆 尼子天目 辰ケサキ台〔尼〕

同下ニ、引拙桶 同クルミ口 同合子 五トクフタ置

十二月五日朝 井戸若州入道 宗二

床 かふらなし

炉 はこいた 兵庫天目 能芋頭 備前水下

十二月廿九日朝 宗易之會 宗無 宗及 宗二

床ニかたつき、四方盆

炉 大なる飯釜、五徳、瀬戸天目、台なし、備前水下

しからき水さし

天正拾三酉正月二日朝、宗易、宗無、宗二

床 花入、細口、薄色生而、板ニ、

炬 はこいた、杉つるへ、金ノ合子

籠ヨリ天目、台なし、後ニ台所望にて、ノセ候而見せ申候、床へ宗

易被上候、

茶過テ、梅ヲ宗易被生候、

薄茶 江藤宗於ノ茶碗

同正月十五日朝 於大坂、宗久会、宗及、宗二

炬 〔林〕 りんてつ、五徳、

台 カス、ヘイカツキ 天目、金ノはうのさき水下

備前物のしめきり 〔古切水指〕

同正月晦日 湯山にて、宗易会、宗二、宗及

筒 かうらいものか、梅、生而、おしかきの釜

この宗易会に於ける湯山は、有馬温泉のことである。秀吉は、正月十七日、有馬温泉に湯治に来ていたのだが、宗易・宗及・宗二らも秀吉の御供をしてこの温泉に来ていたのである。宗二は、間違いなく、秀吉の御茶頭になっていたのである。

同二月六日 堺ニ而孫七郎殿、方々江御供申候て、御茶湯御あり

き候、

孫七郎殿とは三好秀次のことである。彼は秀吉の甥で、養子となり、天正十九年に関白に任ぜられた。

同二月八日 〔羽柴〕 濃州之御会、宗易、宗及、宗二

炬 あられかま、自在、

床 キタウ文字、紅屋宗陽墨跡也、

カウライ茶碗、手桶、面桶水下

羽柴濃州とは羽柴美濃守秀長のことである。彼は秀吉の異父弟で、この年の九月に、大和郡山城主となった。

同五月八日昼 〔羽柴秀次〕 孫七郎殿、〔山と〕 宗二、〔小寺〕 休夢、〔九鬼嘉隆〕 九右馬

床 古岳墨跡、はこいたかま、くよりはかま

志野茶碗、ゆかミ茶碗、備前面桶

同五月十二日朝、長岡兵部太夫殿、松井新介、宗二

床 かふらなし、野菊、生而、手水之間ニ花のけ候、

蒲団釜、風炬、引出而、金ノ合子

よしたなニ芋頭水指、善好茶碗

床 かふらなし、野菊

天正十四年九月二十八日朝、未明

巽山曲音御屋敷ニテ、

宰相様江堺山(上脱)サツマヤ宗二御茶上ラル、

宗二は、この時大和郡山に来ており、城主秀長に茶を進めている。

同十月六日、八時

大納言様へ、中坊ニテ、

ワカヤ コヤキヌヤ ハントウヤ ナヘヤ
道か 宗有 寿閑 常勘 宗立

右五人口切御茶上ラル、我等ヲ召テ御茶被下ル、忝キ事共也、

茶堂堺宗二

山上宗二は、天正十四年十月六日、秀長の口切りの茶事で茶頭を務めたのを最後に、それ以後茶会記から完全に姿を消してしまっている。まだ年令も四十半ば、茶人としてはこれからという時期である。どうしたのであるか？

宗二は再び秀吉を怒らせるようなことをしてしまったのである。秀吉の激昂は、前にも増して激しいものであった。宗二は失脚し、再び流浪の旅に出たのである。

ところで、宗二が秀吉を怒らせ、秀吉の勘気をこうむった原因は何であったのだろうか？これについて明確に説明できる資料は何もないが、唯、先にも引用した『長閑堂記』の記述から、漠然とではあるが、その原因と、宗二の風貌や性格を窺い知ることができる。

「かの山の上の宗二、(薩摩屋)さつまやとも云し、堺にての上手にて、物をもしり、人におさるゝ事なき人也、いかにしても、つらくせ悪く、口悪きものにて、人のにくみしもの也、小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、耳鼻そかせ給ひし、其子を道七とて、(徳川家康)故相国様の茶道して、御奉公中せし、又、父の伝をうけ、短気の口わる物にて、上様御風炉の内あそはされし跡をみて、つきくくし仕なをしけるによりて、御改易に逢、窄人して、藤堂和泉殿伊予在國の時、下国し、その申ひらきなどして、我も有合て、一冬はなせし也、

山上宗二は、利休流茶道の極意を伝授されただけあって、茶の湯は上手であった。彼は茶の湯以外のことにも広く通じ、押しも押されもない一流の茶人であった。このことは、これまでの論考で明らかである。ところが、宗二は顔だちが悪く、しかも毒舌家で、皆から嫌われていたと言っているのである。しかし、利休のように宗二の性格を見抜き、その心を知っていた者にとつて、宗二は頑固者で依怙地なところがあったが、それだけに反って逞しい、信頼の置ける人物であったようである。伴の道七も父親譲りの短気者で、口も悪く、評判の嫌われ者であったらしい。

道七は、徳川家康の茶頭として仕えていたのであるが、ある時、主君家康の整えた風炉の灰形を気に食わないと言って突き崩し、作り変えてしまった。それが原因で道七も改易にあい、浪人する羽目になっ

てしまった。

宗二が秀吉の激怒を招いた原因は、宗二が茶頭の分際で政策上のことや軍事上のことに關して何か生意気なことを言ったためとも考えられるが、伴道七が家康を怒らせたのと同様に、怒らく茶の湯に係わることで秀吉の逆鱗に触れることをしたのであろう。天下一の茶人と自負する秀吉に、茶の湯の専門家と自負する宗二が対立し、譲歩しなかつたのであろう。

その後、山上宗二がどのような放浪生活を送つたのか明らかでないが、天正十五年頃には、小田原城に入り、北条家の庇護を受け、そこで茶の湯を教えていたようである。

「五、三年このかた、宗仁という数寄者が小田原に下り、茶湯がこののほか流行し、氏直を始めとして、諸侍がこの道に耽溺し、早川、荻窪、久野のあたりに茶屋を設け、あるいは巡礼を装い、あるいは旅僧になつて茶屋に入るといった慰みごとが、毎日のように催された。このような御遊興は不吉の前兆であると、心ある人々はささやき合つていたが、果たして、三、四年の内に哀れなありさまとなり果てたのも、思えばふしぎのことどもである。」⁽⁶⁾

右の記事は、『小田原日記』中の、小田原落城について述べた一部分である。「宗仁」とは「宗二」の誤記とされているから、山上宗二のことになる。また、「哀れなありさま」とは、天正十八年の小田原落城のことであると言われている。とすると、宗二は天正十八年当時から遡つて三年か五年前に小田原に来ていたことになる。

この推測が正しいなら、宗二は、天正十四年十月六日（秀長の口切りの茶事で茶頭を勤めた日）以後、いつの頃か正確には判らないが、秀吉の勘気をこうむつた後、直接小田原に下つたと見做すことができる。

数寄の世界に君臨する茶の湯の名人と謳われた宗二にとって、茶の湯と離れて暮らすことは耐え難いことであつたろう。彼は、小田原に身を寄せると間もなく、茶の湯を教え、お茶を流行らせていたのである。それと同時に、北庄落城の折（天正十一年）焼失してしまつた師宗易からの秘伝書ならびに三十年に亙る茶の湯覚書を、伴や門人たちから懇望され、再び作成しようとしていた。

茶の湯の秘伝書を残したいという宗二の願望は、勿論以前からあつた訳だが、秀吉の二度目の逆鱗にふれてから急激に具体化するようになった。

「宗二ほどの豪傑であっても、秀吉という権力者の執拗な憎しみに追いつめられて、次第に安住の地も狭まっていけば、やがては絶望的な運命に対する不安に陥るのはやむをえない。しかし彼が深刻に悩んだのは、生命の不安よりはむしろ茶の湯に対する激しい愛着から生ずる焦躁感ではなかつたであらうか。茶の湯に対する愛着が深ければ深いほど、師から受け継いだ秘伝とその半生を費やして工夫した芸の、おのれの死と共に葬り去るのは、いかにも忍び難いことではなかつたか。それはすぐれた茶湯者の本能ともいふべきものであつたろう。」⁽⁶⁾

宗二が書いた秘伝書は数本あると言われている。そのうちの一本は、

天正十六年二月二十七日付で、桑山修理大夫に与えられた。その奥書には、

江雪齋

参

右一巻、今度御行脚之節、子ニテ候道七ニ書遣候、道七、其方へモ可レ致ニ進上ニ之由中候之条、奉レ贈候、

と記されている。

宗二は、浪人中秘伝書を認め、それを伴道七に遺すことにしたが、道七からの要望があり、桑山修理大夫にも一本進上することにした、と明記しているのである。桑山修理大夫は、秀吉の異父弟羽柴美濃守

秀長の家臣であり、後に紀州和歌山四万石の大名となった人物である。

この頃は、まだ、宗二と秀吉との間に特別険悪な事態が生じていた様子を窺い知ることはできない。

ところが、その翌年、天正十七年二月付で江雪齋に与えられた一本の奥書を読むと、宗二がかなり切迫し、明日をも知れない状況に陥っていることが判明する。

此一巻之儀、今度御上洛ニ付テ、以テ血判之誓紙ヲ御懇望候条、不残心底書頭、進上候、第一、窄人中、以御芳志、当府ニ堪忍仕之条、二十余年稽古之程、大抵申度候、行々迄於可被成御数奇者、口伝密伝毛頭残申間敷候、此一札、拙子上洛仕候敷、死去仕候後ニ、執心中御弟子ニ可在御伝者也、仍印可状如件、

天正十七年己丑二月

宗 二判

板部岡江雪齋は、小田原北条家の家臣板部岡融成である。彼は「北条家の重臣田中越中守泰行の長男として生まれ、天正十八年七月小田原落城後、上方勢に捕えられ、秀吉の面前で首を刎ねられるところであったが、その最期の態度がrippだったので、秀吉に惜しまれて、再生し、姓を岡野と改め、のち御伽の者となった。秀吉の死後は、家康の御伽に侍し、慶長十四年六月三日、七十四才を以て病死している。」⁽⁷⁾江雪齋は、能筆で、歌道にも通じており、茶の湯に熱心であったと言われている。

当時、秀吉と北条氏との関係は極めて険悪な状態に陥っていた。その事態を打開するために使者として板部岡江雪齋が選ばれ、上洛することになった。江雪齋は、この重大な使命を果たすに際して、宗二に、茶の湯の秘伝書を書いてくれるよう懇望した。しかも血判の誓紙を添えての懇願であった。

宗二は、小田原に到着して以来ずっと北条氏からは手厚い持て成しを受けて来たから、その返礼の意味で、二十年余稽古したことや、珠光、紹鷗・利休に至るまでの口伝・密伝をすべて残らず伝えることにした。この秘伝書は、自分(宗二)が上洛するか、または死去した場合には、茶の湯に熱心な弟子たちに伝えて欲しい。

このように付記された、この奥書は、宗二の状況を具体的に伝える最後の記事であり、遺言書的人格を持つ文章である。ここで宗二が記している「拙子上洛仕候敷」の一節が、助命嘆願のために秀吉のもと

に赴くことだとすると、その次ぎの一節「死去仕候後ニ」には、悲痛な思いが籠められている。宗二は、自分の死が間近に迫っていることを予感しており、既に死を覚悟していたようである。従って、彼が上洛する決意の裏には、若しやと言う一縷の望みが無い訳ではなかったが、捨て身の気持が多分にあつたことと思われる。

このような、死に直面した状況と心境に於て、宗二は茶の湯の秘伝書を丹念に書き続けていた訳であるが、この秘伝書に注がれた宗二の心血は、恐らく想像を絶するものであつたと思われる。

それから間もなく、宗二の予感的中し、現実となつた。天正十八年四月十一日、小田原落城の三カ月前、宗二は秀吉に捕えられ、斬刑に処せられた。四十八歳であつた。

宗二の非業の最後については、具体的に何も判っていないが、こゝで再び、既に引用した『長閑堂記』の一節が不気味な光芒を放つ。

「かの山の上の宗二、……いかにしても、つらくせ悪く、口悪きものにて、人のにくみしもの也、小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、その罪に、耳鼻そかせ給ひし、……」

『山上宗二記』

こゝで『山上宗二記』の構造に目を転じてみよう。

まず巻頭に、茶の湯の起源とその歴史についての説明がある。足利三代將軍義満から説き起し、八代將軍義政の時代に入る。義政は、同朋の能阿弥から茶の湯の開祖と言われる村田珠光を推薦され、彼を茶

の湯の師範として召し抱えた。それから珠光流の侘茶が世に広まり、「其比茶湯セザルモ(者ハ)人非人ト等シ」と言われる程までに茶の湯が流行した。珠光流の茶の湯は、奈良・京都・堺の町人社会にまで広まった。義政の死去の後も、珠光の弟子は増え続け、同朋衆芸阿弥・相阿弥も先師の教えを守つた。やがて幕府の衰退するにつれて、東山御物も巷間に流出するようになった。

珠光の後継者が列挙され、それから茶人としての規格が示される。

茶人は、茶湯者・侘教寄・名人・古今の名人とに区分される。つまり、「目利ニテ茶湯モ上手、教寄ノ師匠ヲシテ世ヲ渡ル」者を茶湯者、「一物モ不持、胸ノ覚悟一、作分一、手柄一、此三箇条ノ調タル」者を侘教寄、「店物所持、目利モ茶湯モ上手、此三箇モ調ヒ、一道ニ志深キ」者を名人と言ひ、等々……

次に、本文は「珠光一紙目録」で始まる。これは、珠光が能阿弥から日利の道を学び、それを丹念に書き留めた覚書である。これには、紹鷗の茶の風体、利休の教え、それに宗二の注釈が付け加えられている。

その後、茶湯道具の説明が延々と続き、それから、「茶湯者覚悟十体」が解説される。

これは、茶湯者の心構えを十ヶ条にわたって訓えたもので、簡単に言えばお茶の先生の守るべき心得である。この箇所は、珠光流茶の湯の精髓が漲っており、珠光の秘事を追究するのに欠くことのできない重要な部分である。また、宗二が注釈を付記していることから考えるなら、利休流の秘訣も示されている部分であると見做すことができる。

この茶湯者覚悟十体に続いて、「又十体」という項目が生じる。これは、紹鷗か利休が珠光の「茶湯者覚悟十体」に、「目明」「手前」「所作」等々に関する秘事を補足したものである。

その次に、茶の湯の年来稽古とも言うべき項目が挙げられている。こゝでは、歌道・能・禅などの茶道への影響が語られているのだが、明らかに世阿弥の『風姿伝』の年来稽古条々の影響が見られる。

次に、「茶湯者之伝」と題して、能阿弥・珠光開山・松本珠報・京千本道提・京粟田口善法・和州南都古市播州……等々の略伝を掲げている。

以上が「珠光一紙目錄」と言われている覚書であるが、その後には、「師ニ問置密伝ヲ拙子注之条々」とことわって、宗二は師利休から聴聞したことを簡条書にしている。

次に、「紹鷗四疊半左勝手・二疊半」、「利休細三疊・二疊・一疊半」、「宗二細三疊」という茶室の図面を掲げ、それぞれについて説明している。

それから茶室に用いる「材木之事」にふれ、その後で「閑白様へ被召置当代ノ茶湯者」として、田中宗易・今井宗久・津田宗及・山上宗二・重宗甫・住吉屋宗無・萬代屋宗安・田中紹安を挙げている。そして、『山上宗二記』の最後は、次のように記されている。

一 総別、茶の湯ニハ、昔ヨリ以来無書物、唯古キ唐物ヲ多く見覚テ、上手ノ茶湯者ト毎々参会シ、作分ヲ出し、昼夜茶湯ヲスク覚悟ガ則師匠也、

此書物ハ初心ノタメニ重宝也、教寄者無益也、

これを分かり易く書き換えると、次のようになる。

およそ、茶の湯を習うには、昔から書いた物はなかった。従って、たゞ古い唐物茶器を数多く見て、上手な茶湯者といつても会合し、多くを学ぶと共に自己の創意工夫を凝らす必要がある。それに、昼となく夜となく茶の湯に親しむ覚悟、この覚悟そのものが茶の湯の師匠なのである。

この書物（『山上宗二記』）は、初心者のために重宝である。教寄者には無用である。

茶の湯の起り

夫茶湯ノ起ハ、普光院殿鹿園院ノ御代ヨリ唐物絵讀等歴々集リ畢（おわんぬ）、其比御同朋衆ハ善阿弥・毎阿弥ナリ、右両 公方様薨去ノ後、桂雲院殿ハ十三御歳御落馬ニテ御短命也、其後、東山慈照院殿ノ御代名物悉集リ畢、花ノ御所様へ御家督ヲ譲リアソハシ、時、明光院殿其御後見トシテ都ニ残り給、御名物少々御授与シ玉フ、其外ニ七珍万宝ハ其数ヲシラス、慈照院殿ハ東山ニ御隠居ニテ、四時トモニ昼夜御遊興アリシニ、比ハ秋ノ末、月待宵ノ虫ノ音モ物アハレナル折節、能阿弥ヲ召テ、源氏物語雨夜ノ品サタメ坏読セ、調連哥、月見、花見、鞠、小弓、扇合、草尽、虫尽、サマミ興ヲ催、来方事トモ御物語アリシ時、慈照院殿被仰出、昔ヨリ有来遊興モ早事尽ヌ、漸（ありきたりの）、

冬モ近クナリス、雪ノ山ヲ分テ鷹狩リモ老身ニ不似合、何カ珍數御遊在ヘキト御錠アリシニ、能阿弥謹テ得心シテ、憚ナカラ申上ル、御釜ノ熱音ハ松風ヲ猜ム、且又、春夏秋トモニ面白御遊ニテ候、コノコロ南都称名寺ニ珠光ト申モノ御座候、此道ニ尤深ク、三十歳已来茶湯ニ身抛、又ハ孔子ノ道ヲモ学ヒタルモノニテ候、珠光ヨリ蜜伝ノ事、口伝ノ事、并二十一箇条ノ子細ヲ以テ悉ク言上ス、又、唐物御敵ハ非時ノ物ヲ眼前ニ見ル、是又名物ノ徳也、小壺、大壺、花入、香炉、香合、絵、墨蹟等古美タル御遊ハ茶湯ニ過タル事在間敷、又禅宗墨跡ヲ茶湯ニ用ル事在リ、是ハ珠光カ休和尚ヨリ円悟ノ墨跡ヲ得テ是ヲ一種ニ楽ム、然ハ仏法モ茶湯ノ中ニアルト委細ニ次第ヲ言上ス、依之、慈照院殿珠光ヲ被召出、茶湯ノ師匠ト定給ヒ、御一世ノ御タノシミ此一事也、

喫茶の風尚は、奈良時代の末期には、既に中国から伝来しており、平安時代の初期にはかなり広まっていた。特に上層知識階級の間には大変流行っていた。

やがて、唐の衰退が始まると、日本に於ける唐風文化の模倣熱も冷め始め、喫茶の風尚も衰えて行くようになった。そして間もなく、朝廷の特殊な法会などを除いて、茶は単なる薬用としてしか用いられないようになってしまった。

鎌倉時代に入って、臨濟宗の開祖明庵栄西(一一四一—一一五五)や西大寺の僧叡尊(一一二〇—一一九〇)などを通じて、喫茶の風習は再びもり上がり、僧侶の社会を始め、武士社会にまで浸透し、流布するよ

うになった。やがて時代と共に、庶民階層にまで及び、南北朝時代に入ると、僧侶の社会では茶礼として、武士の社会では茶寄合として、一段と進展するようになった。この茶寄合の実体は、「闘茶の会」であり、特に武家社会で流行していたものである。

「およそこの時代には、公家・武家・庶民を問わず各階層にわたって各種の博奕が公然と開帳され、囲碁・将棋・双六には無論、貝合せ・揚弓などの遊戯や、連歌などにも、賞品や金銭のかけられるのが一般の風潮で、まさにギャンブル全盛の時代であった。闘茶もまた新種の高尚でモダンなギャンブルとして迎えられた、というのが実情であった。そして、このようなギャンブル流行は、実は当時の時代の傾向なしいし人心の動向と対応し、深くそれに根ざすものであった。」

南北朝時代に流行した茶寄合(闘茶の会)は、室町時代の前期になっても依然として行われていたが、書院造という新しい建築様式が生まれ、書院座敷が登場するに及んで、書院茶礼が誕生することになった。

書院茶礼以前の喫茶の風習を概観して解ったことだが、茶寄合は、勝負本位の茶で、ギャンブル的な遊戯性や、酒宴乱舞を伴う官能的な享楽性を意図したものであり、また、茶礼は、大徳寺・妙心寺などで厳修され、多分に佳茶の精神とも関連性があるのだが、「茶の湯以前」の茶儀であって、茶の湯ではなかった。

書院茶の湯の誕生をもつて、本格的な茶の湯が始まったと見做すことができる。従って、「茶湯ノ起」は、『山上宗二記』が指摘してい

る通り、鹿園院（三代將軍足利義満）、普光院（六代將軍義教）、慈照院（八代將軍義政）の頃であった。正確には、義教の時代からであった。

書院茶の湯は、床の間・違棚・付書院などが設けられ、畳の敷きつめられた座敷で、台子を用いて行われた「格式法儀ノ厳重」な茶会であった。それまで曲糸を用いて行われた唐風の立礼とは違って、畳に坐る日本的な座礼であった。しかし、床の間や違棚などに飾られた絵画・香炉・香合・花器・茶壺・茶盆・書籍・文房具・茶道具などはすべて舶来の珍品・名品だけであった。つまり、唐物本位の茶会だったのである。

舶来趣味・異国趣味から、唐物が基調にされたこの茶会は、茶寄合の場合とあまり変りないが、その座敷飾りは、秘蔵の名品をこれ見よがしに屋敷中に掛け並べ、陳列したのに対し、芸術的に優れた、かなり精選された唐物が使用され、全体的に簡素化され、洗練された装飾であった。

しかしながら、唐物を美的観賞や所有欲の対象とする風潮は高まるばかりで、間もなく足利將軍家の唐物数寄を誘発する結果になった。

三代將軍足利義満は、南北朝の合一を実現すると、北山に金閣寺を建て、歌道・能楽・舞楽などを奨励し、北山文化を生み出した。義満は、永楽四年（一四〇六）、明との正式国交と勘合貿易が開発されると、唐物道具の輸入に力を入れ、その蒐集に乗り出した。義満の集めた多くの唐絵は、東山御物の中でも特に優秀な作品であると言われている。

六代將軍義教も唐物諸道具に興味を示し、それに対する評価や執着は並々ならないものであった。義教は、唐絵を始め、多くの名品を秘蔵しており、後花園天皇室町殿行幸（一四三七）の折には、その秘蔵の名品を屋敷中に展示し、天覧を仰いだと言われている。

七代將軍義勝（桂雲院殿）は、『山上宗二記』の序章では、「十三御歳御落馬ニテ御短命也」と記されているが、義勝の死因は、落馬ではなく、赤痢であったと伝えられている。年令は十三歳ではなく十歳であった。

八代將軍義政は、応仁の乱の戦乱をよそに、奢移風流にふけり、乱後は、東山に山荘を造営し、そこで風雅三昧の生活を送った。義政こそ唐物数寄の大成者であった。彼の時代に名品・名物がほとんど集まったと言える。「義政はさらにその蒐集に励むばかりでなく、能阿弥・芸阿弥・相阿弥の親子孫三代の同朋衆をその手足として、見事にこれを統一整理し、その識別や序列を世に知らしめたのである。こゝにわが国の唐物に対する鑑識眼を高めたばかりでなく、唐物に対する敬仰が正確な知識の裏付けを得た結果、より芸術性を高め、数寄の風流がより高度なものに引き上げられたことが強調されるのである。すなわち数寄がともすれば独りよがりの物数寄に陥り易い欠点を、学究的考察によって立派な美的価値判断を伴ったものに昇華させてくれたということになる。」⁽⁹⁾

同朋衆というのは、將軍の側近にあって、芸術や芸能、またはそれに類する文化的な雑務などに携わる者のことで、普通阿弥号を称した。能阿弥（一三九七〜一四七一）は、足利義教・義政に仕えた同朋衆

である。彼は、中尾真能と言ひ、壮年の頃までは表具師の仕事を担当していたが、やがて美に対する鋭い感覚が買われて、將軍家所蔵の唐絵・唐物の出納や飾りつけを担当するようになった。彼は、美術品の鑑定に長じ、連歌・絵画・書院台子の名手であり、当代きつての万能の文化人と言われた。

書院飾りや台子の法式を制定し、書院の茶の湯を成立させた能阿弥の業績は高く評価されなければならない。特に、『君台観左右帳記』や、水墨画『白衣観音』は、茶の湯とは深い係わりを持ち、今日でも茶道を研究する場合には極めて重要な資料となっている。

芸阿弥（一四三一〜八五）は、父能阿弥と共に早くから將軍家に仕え、父親同様、唐絵・唐物の管理や鑑定、それに飾り付などを担当していた。彼も絵画や連歌に長じており、彼の残した水墨画『観瀑図』は有名である。

相阿弥（一五二五）もまた、祖父や父と同様に、將軍家所蔵品の出納・保管・鑑別・表装・飾り付などを担当し、東山文化を生み出した義政の活動に大きく貢献した。とりわけ、祖父の着手した『君台観左右帳記』を完成させ、流布させ、後代にそれを唐物道具の指南書として伝えた功績は大きい。

さて、東山山荘に隠棲した義政は、ある秋の末の月待つ宵、かすかにすだく虫の音にもあわれを感じる時節、能阿弥を召して、『源氏物語』の雨夜の品さだめなどを読ませたり、また和歌・連歌・月見・花見・蹴鞠・小弓・扇合わせ・草履し・虫尽し等々、さまざま遊びを

催し、四方山の話などしていたが、それらが終わった時、義政は能阿弥に「これまでの有り来りの遊興にはもう厭きた。雪の山での鷹狩りも老体には似合わしくない。何か他に珍らしい遊びはないのか」と尋ねた。そこで能阿弥は、恐懼して次のようにお答えになった。「憚りながら申し上げますが、茶の湯がございませう。その釜のたぎる音は、松風の音とその風情を競うほどでございませう。しかも、茶の湯は春夏秋冬どの季節でも楽しむことができます。

この頃、奈良の南都称名寺に珠光と申す者がおりますが、この者は茶の湯に熱心で、三十歳の頃からこの道に身を投げ入れ、修行いたしておられます。また彼は、孔子の道（儒学）にも造詣が深いと聞いております」と。

能阿弥はさらに続けて、自分は珠光から茶の湯について、密伝・口伝、並びに二十一箇条を伝授されましたが、その内容は、しかしかたでございませうと申し上げた。そして次のように語り続けた。「唐物荘りの目的は、つね日頃目にしない優れた芸術作品を鑑賞して、目を肥やすことにあります。これも名物道具の徳と申せるものでございませう。

小壺（茶入）・大壺（葉茶壺）・花入・香炉・香合・絵・墨蹟等々のふるびた品物を楽しむ遊びでは、茶の湯に優るものはございませぬ。

またさらに、禪宗の墨蹟を茶の湯に用いることがございませう。これは、珠光が一休和尚（宗純）から圓悟の墨蹟を授けられて、これを床に掛けて楽しんだことから始まったこととございませう。従って、仏法も茶の湯の中にあると申せるのではないでしやうか」と。

義政は、能阿弥の話の聞くと、茶の湯に大変な興味を抱くようにな

り、珠光を召し出し、茶の湯の師匠と定めた。それ以後義政にとって、茶の湯がこの世で一番楽しいものとなった。

『山上宗二記』の右の序章には、義政と茶の湯、珠光と能阿弥との結びつき、また、義政の珠光登用問題などに於て、年代的に辻褃の合わない、事実と相違した箇所が見られる。

まず、東山殿足利義政が能阿弥の推挙で珠光を召し抱えたという箇所問題がある。つまり、義政が東山山荘に移った時（一四八三）、能阿弥はすでに死没（一四七一）しており、存在していなかった。従つて、東山山荘で能阿弥が義政の遊興の相手をしたり、珠光を推挙したりできない訳である。

たゞ、能阿弥が義教・義政と二代に互る同朋衆であったことは、すでに述べた通りであり、また、能阿弥の生前、珠光が能阿弥から書院台子の茶の湯を学び、唐絵・唐物の鑑定の仕事などを教わったことは確かである。『南方録』に記載された珠光の四畳半座敷の飾りを見れば、

四畳半座敷ハ、〔村田〕珠光の作事也、〔しのぎまき〕真座敷とて鳥子紙〔とりのこがみ〕の白張付、〔しらはりつけ〕杉板のふちなし天井、小板ぶき、〔ほうぎょうつくり〕宝形造、〔いっけんじ〕一間床也、〔ひん〕秘蔵の円悟の墨跡をかけ、台子をかざり給ふ、其後、炬を切て、弓台を置合〔おきあわせ〕られし也、〔おおかた〕大方、書院のかざり物を置れ候へども、物数なども略ありし也、床にも、二幅対のかけ絵、勿論一幅の絵かけられし也、前に、〔しよく〕卓に香炉、花入、あるひハ小花瓶に一色立華、〔りつか〕あるひハ料紙硯箱、〔短冊〕短尺箱、〔ふんだい〕文台、或ハ盆山、葉茶壺など、これらハ専かざられ

し也、

とあり、珠光が能阿弥の茶の湯から受けた影響がはっきりと判る。またこれとは逆に、珠光自身の工夫した茶の湯や方式などが能阿弥に伝えられていたことも事実である。

次に、義政が珠光を通じて茶の湯を知ったという点に問題が生じる。義政が茶の湯を知ったのは文明五年（一四七三）のことである、と伝えられている。『山上宗二記』の記載事項は間違っているのである。これらの間違いを楯にとつて、『山上宗二記』の茶書としての確実性を疑う者がいる。しかし、この箇所の間違ひは、無知や無意識による誤りではなく、ある意図のもとに意識的に行われた文章上の技巧であると言ふことができる。

桑田忠親氏は、この箇所のうそについて次のように述べている。「それは、宗二記が典型的な珠光流茶道の秘伝書であり、珠光をもって茶湯の開山とあがめる必要から、珠光以前の茶湯、すなわち十種茶の興行の如き闘茶だけでなく、能阿弥の開いたと思われる東山流の茶道をも黙殺し、珠光の茶法によって初めて能阿弥も義政も茶の湯の遊びを知ったかのごとく書きなしたためである」と。

この序章に於ける義政と珠光の関わりについては、次のように考えることができる。

義政は、唐物数寄の大成者であり、彼の書院の茶の湯は庶民とは無縁な貴族的な茶の湯であった。その書院飾りには、唐物の中でも特に高雅な、貴族的な気品のある逸品が用いられた。つまり、唐物至上主

義の飾付けであった。

これに対し、珠光は、 \wedge 冷え枯れる \vee ・ \wedge 冷えやせる \vee 美意識を茶の理念とした、和物の美の発見者であった。彼は、義政とは逆に、廬相な唐物やあまり美しいとは言えない諸道具を、彼独自の美意識で捉え、そこに枯淡蒼古の美を見付け出したのである。

珠光の美意識の根底にあって、その美を発見させ、ついには利休の侘茶を完成にまで導いたものは、禅の精神であった。珠光は、山上宗二が、

茶湯ハ禅宗ヨリ出タルニ依テ、僧ノ行ヲ専ニスル也、珠光・紹鷗、皆禅宗也、

と伝えているように、禅の精神を体得し、一休和尚から戴いた圓悟克勤の墨蹟を茶の湯に用いて、仏法も茶の湯の中にあると説いた侘茶の開山であった。

従って、義政が珠光を召し出して「茶の湯の師匠に定めた」と言うことは、書院の茶の湯に草庵の茶の湯が導入され、侘茶の精神が萌芽し始めたことを示すことになる。つまり、『山上宗二記』に於て、義政は書院の茶の湯と草庵の茶の湯の間に位置する過渡期の人物と見做されたのである。

こう考えて見ると、この序章は、年代的に辻褃の合わない箇所があるにしても、茶の湯の起源について概説し、それに続いて侘茶の系譜を語る本文の序として、『山上宗二記』の巻頭を飾るに最適な文章で

あるとすることが出来る。(つづく)

註

『山上宗二記』と茶会記からの引用文には、論考が煩雑になるのを避けて、註を付けなかった。なお、引用した茶会記は、左記のものである。

『天王寺屋会記』(宗達茶湯日記)他会記、『宗及茶湯日記』(他会記)、『茶道古典全集』第七卷(淡交社刊)所収

『天王寺屋会記』(宗達茶湯日記)自会記、『宗及茶湯日記』自会記 同全集第八卷所収

『松屋会記』(久政茶会記)、『久好茶会記』同全集九卷所収

『今井宗久茶湯日記抜書』同全集十卷所収

『信長茶会記』『茶道全集』第十二卷(創元社刊)

- (1) 『長闍堂記』 『茶道古典全集』第三卷(淡交社刊)所収
- (2) 桑田忠親著『山上宗二記の研究』(河原書店刊) 一頁
- (3) 数江教一著『山上宗二記』 『茶道聚錦』第三卷(小学館刊)所収 二九二頁
- (4) 同書 二九三頁
- (5) 註(2)の書 六七七頁
- (6) 註(3)の書 二九三～二九四頁
- (7) 註(2)の書 九頁
- (8) 芳賀幸四郎著『わび茶の研究』(淡交社刊) 十六～十七頁
- (9) 小田栄一著『唐物数寄』 『茶道聚錦』第三卷所収 一三三頁
- (10) 註(2)の書 三八頁
- (11) 同書 三九頁